科目区分：学校教育実践コース(音楽教育専修)
授業科目：音楽教育学演習①

音楽教育学演習①

音楽教育講座・田邉　隆

1．授業の目的

音楽教育における実践力向上のために、音楽専門領域の知識を獲得し、技能を養成することは不可欠である。そこで、音楽専門領域と教育実践領域の両視座から、楽典内容を中核とし、弾き歌いやアンサンブルの演習を通して、音楽の諸場面に活用できる表現力を養うことを目的としている。

2．音楽教育学演習の概要

音楽教育学演習は①－⑤の５段階からなり、音楽的事項や事象を音楽教育場面と関連させ、音楽の基礎領域の理解感得から次第に教育実践への応用に関する内容へと移行するように計画している。

この音楽教育学演習①では、音名・音程・和音・楽語について学び、その演習として弾き歌いを行う。特に倍音構造と伴奏型との関係を重視し、伴奏方法による音響の違いについて理解する。また他者と協同して音楽表現を作り上げるために、トーンチャイム演奏を体験する。トーンチャイム演奏に際し、曲線運動を基本とした基本的な奏法や音割り（音の割り振り方）について演習を行う。

受講数は、学校教育実践コース音楽専修の８名であり、楽典内容の理解と弾き歌いの実技試験を中心として評価を行い、最終時間に無記名のアンケートを実施した。

少人数の授業であるため、楽典事項の小テストや弾き歌いを常に課すようにし、一人一人の進捗状況の把握に努めた。

3．授業への参加

受講数は音楽専修の 8 名であり、全体の出席率平均は、95 %である。

欠席回数	0 回	1 回	2 回	3 回	平均出席率
人数(8 名)	5 名	1 名	1 名	1 名	95 %

また受講にあたり、予習や復習に費やす時間は、1 週間で平均１時間である。

時間	30m	1h	2h	3h	平均時間
人数(8 名)	2 名	5 名	1 名	0 名	１時間

4．授業に関するアンケート結果

授業アンケートは、15 回目の授業時に行った。各項目は５段階の尺度で行った。以下、集計結果である。

①将来、教職に就く意志はあるか。

就きたい←	+2	+1	0	-1	-2	→就かない
(人)	4	3	1	0	0	(人)

この比率は、授業開始時と同じで、この半年での変化は無い。

②音楽教育への関心はあるか。

ある←	+2	+1	0	-1	-2	→無い
(人)	6	1	0	0	0	(人)

子どもと音楽との関わりについて、強い関心を持っている受講生が多い。授業において、学校現場へ出向き、子ども達と一緒に演奏を行う希望が出るなど、実践活動の希望を持っている。

③授業の難易度はどうか。

難しい←	+2	+1	0	-1	-2	→容易
(人)	0	4	4	0	0	(人)

やや難しいと中庸が半々の割合であるが、今後、課題の頻度や内容を工夫するとともに、少人数の利点を生かし、理解度を増すことにより、より学習が容易になるよう、配慮が必要である。

④弾き歌いは上達したか(自己評価)

上達した←	+2	+1	0	-1	-2	→上達無し
(人)	3	4	1	0	0	(人)

上達と練習時間の関係は、上達(+2)が一週間に 78 分、(+1)が 45 分、(0)が 60 分であった。弾き歌いは、旋律(コードネーム付)のみの楽譜を基に、各自が伴奏を工夫して演奏する形態を取った。倍音列に基づいた伴奏方法について解説し演習したが、大半は、各自の即興的な編曲も加え、倍音構造を配慮した演奏ができた。しかし低音密集の伴奏型で伴奏する受講生が居るなど、まだ理論を演奏へ応用する段階に無いケースもあり、弾き歌いへの丁寧な援助が必要である。なお、これら実技の様子は、今後の音楽教育学演習は②以上で活用するために、記録として録画した。

⑥音楽理論(楽典)への興味はどうか。

興味あり←	+2	+1	0	-1	-2	→興味無し
(人)	5	3	0	0	0	(人)

半数以上の８枠を費やし、理論面について講義演習を行ったためか、当初の理論への抵抗感を払拭できたと考える。

⑦トーンチャイムへの興味はどうか。

興味あり←	+2	+1	0	-1	-2	→興味無し
(人)	8	0	0	0	0	(人)

全員がトーンチャイムの演習をさらに希望するなど、本科目の補足的内容であるにもかかわらず、最も興味を強く抱いた内容であった。②の音楽教育への関心とも相まって、教育現場へトーンチャイム演奏で子どもたちと交流したいとの希望が出るなど、放課後など自主的な練習も見られるようになった。

⑧この授業を、音楽文化コース等との合同授業で実施することについてはどうか。

単独授業←	+2	+1	0	-1	-2	→合同授業
(人)	8	0	0	0	0	(人)

１クラス８人という人数は、理論や弾き歌いを全受講生が時間内に質疑応答できる時間であり、小アンサンブルを体験するに手頃な人数であることを実感し、学校教育単独の授業を希望したものと思われる。

各専修やコースに合った独自の授業を学生が希望しているならば、事情が許す範囲で現在の形態を維持することが重要であると考える。

5．事前と事後の調査

授業開始の最初に、楽典事項についての事前調査を行い、最終の授業後に予告せずに再度、同内容の調査を行い、この半年間の理解度について記述式で調査した。

項　目　　正答率	授業前	終了後
1)倍音	12.5 %	62.5 %
2)ハ音記号	12.5 %	87.5 %
3)3/4 と 6/8 拍子の相違	87.5 %	100.0%
4)演奏順	75.0 %	100.0%
5)*fff*	100.0%	100.0%
6)中庸な速度	12.5 %	100.0%
7)音程(長・短・増・減)	34.4 %	93.8 %

この調査で分かることは、「倍音」を例にあげると、倍音列は全員が第 11 倍音まで記譜できるにもかかわらず、言葉で説明を求めると正答率が低下する。すなわち感覚的に認知していることを、意識化や言語化する必要がある。

また音程のように「減 1 度」という解答に代表されるように、ついうっかり間違えるケースが多く、慣れるまで一定量の練習が不可欠であることも分かる。

6．今後の課題

次年度からは、カリキュラムの変更により、音楽教育学演習は①－④となり、受講機会が半期減少する。従来の５回の内容を４回に集約する上で、①と③で理論的側面を中核とし、②と④を学校教育専修内の合同授業とし、アンサンブル活動を複数学年で体験させることで、より学習効果を向上させることが可能になると考える。